

第4回学都松本・教育100年を語る会

「ぼくらは開智国民学校一年生」～戦時下の奉安殿と教育勅語～

平成30年11月24日（土）

あがたの森文化会館 1-5教室

おはなし：生涯学習実践者 手塚 英男さん

皆さん、今日はおいでいただきありがとうございます。手塚と申します。私は昭和37（1962）年から松本で社会教育の仕事にずっと関わってきました。このあがたの森が誕生したのが昭和54年だと思いますが、その数年前からここを残すか残さないかという論争のなかでここを残すことに取り組んできて、初代あがたの森館長兼公民館主事兼図書館司書兼防火管理者兼…と9枚も辞令をもらいまして、その頃あがたの森を利用していた市民から「何でも屋館長」と呼ばれ駆け回っていました。その後、なんなん広場に行ったり中央図書館に行ったりと、社会教育の現場でずっとやってきました。そのようななかで市民の戦争体験を語ってもらい、それを聞き、それを「信州年寄り通信」という年寄りの綴り方文集に15年ほど取り組むなどいろいろなことをやってきましたが、自分自身も戦争体験を語らなければならないと10年ほど前に考え、私が語ることでできる戦争体験という「開智国民学校の子どものときの体験だ」と思い、この紙芝居を作りました。このあがたの森を残したときのエピソードはいろいろありますが、松高同窓会が中心となって取り組まれた保存運動と、市民の学習文化活動にこの建物を活用するという活用運動の両方があり、これだけのものが残りました。その一角であるこの教室でこのような集まりを開けて私はとても感慨深いです。今、そこの旧制高等学校記念館から買ってきましたが、このような絵葉書が310円で売っています。これは、私がここにいたときに作った最初の絵はがきです。この絵は松本の社会教育の大先輩であり画伯でもある西沢洋さんが水彩画で描いてくれました。ここに添えてあるコピーは私が書いたもので、北杜夫さんにこの絵はがきにふさわしい歌を一首書いてくれないかと頼んだところ、「檜落葉の音もこそすれ あきらめに 似しわが歩み ここにとどまる」というものをいただきました。北さんは昆虫の研究家になりたいと思っていましたが、父親である斉藤茂吉に「俺の跡を継いで医者になれ」と言われ東北大学に行ったので、「あきらめに 似しわが歩み」には昆虫学者として歩めなかった気持ちが書いてあると思います。売店で聞いてみたところ、一番売れる葉書はこれだそうです。

私は昭和14年1月生まれなので、来年の1月で80歳になります。79歳はあとわずか2か月です。その学年は、最後ではありませんが戦時中の昭和20年4月に国民学校に入学した学年になります。私は駅前の新伊勢町に住んでいたので、開智国民学校に入りました。その頃の開智国民学校は女鳥羽川沿い、今の中央公民館（Mウイング）のある

あたりにありました。そして8月15日を迎えました。疎開をしていましたのでその体験も含めて紙芝居を作りました。今日は皆さんのお手元にお渡ししてある資料に、事務局の方でまとめていただきました。これから行う紙芝居「ぼくらは開智国民学校一年生」は、1ページにある「これは、みなさんが生まれるずっとずっとむかし みなさんのお父さんやお母さんが生まれるもっともっとむかし じいちゃんやばあちゃんがまだ子どもだったころ、松本の開智小学校にほんとうにあったお話です。」というところから始まります。この紙芝居を作った経緯が2ページ目に簡単にまとめてありますが、2012年3月ですからもう6年ほど前でしょうか。「講座 戦争と子ども～われら開智国民学校一年生～」というテーマで話をしてほしいと頼まれました。そのとき話をしていたら、そこに参加していた年配の女性が「話をするだけではそれで終わってしまうので、手塚さん、紙芝居にまとめて歩いて回りましょうよ」と言われて、それはいいなと思いまとめたのがこの紙芝居です。主人公の「ぼく」はアジア太平洋戦争末期の昭和20年（1945年）4月、開智国民学校一年に入学しました。それから8月15日敗戦の日まで、実際に開智であったこと、「ぼく」が体験したことを日記風に綴ったのがこの紙芝居です。あの時代、この信州・松本にも戦争があり、開智国民学校の子どもたちもそれぞれの戦争体験を重ねてきました。紙芝居は、当時のことばで、その時の子どもの思いで、ありのままに開智の「戦争と子ども」を再現しています。苛酷な戦争体験とはいえませんが、戦争遂行の「国家総動員」体制のもとで、地域や学校や家庭のすみずみにまで、そして大人や子どものこころの奥深くまで、戦争が支配の網の目を広げていたことがわかります。ものがたりをまとめるに当たり、わたし自身のそして同級生たちの体験・記憶のほかに、参考にした資料は次のとおりです。①の『史料 開智学校』は、開智学校でとても厚いものが十数冊、全集としてあります。そのなかに「学校日誌」というものがありまして、これは先生が毎日書いたものです。②に手塚佳子日記帳とありますが、彼女は私が入学した当時開智国民学校五年生だった私の姉です。彼女の昭和20年4月～6月までの日記帳が残ってまして、これを教師が書いた国民学校日誌と照らし合わせてみるといろいろなことがわかります。そういった意味で貴重な資料であるということで、開智に寄贈しました。それから、昭和20年4月に入学した一年三組のクラスがずっと同級会をやっていますが、還暦のときに『高楼』という文集を作りました。そのとき私が編集長を務め、「そのとき、わたしは～昭和20年8月15日～」という特集をするから書いて送ってほしいと言ったらけっこうな数が返ってきて、これも大事な資料になっています。今年の5月に傘寿の同窓会を行いまして、これがそのときの写真です。戦時中の松本幼稚園の園児だったころの写真から、70数年経つとみんな立派な老人になっているものです。それから、④の戸田金一さんが書かれた『国民学校物語―焼却を逃れた学校文書から』という本ですが、国民学校の資料は戦争が終わったときにみんな焼いて捨ててしまっていて、そのなかで残った資料を集めてまとめたものです。⑤の『松本市史 第二巻歴史編Ⅲ』は、戦争中の松本のことが書かれています。そして「この紙芝居が、おおぜいの松本市民の方がた、とりわけ子どもたちや戦争を

体験したことのない若い世代のみなさんにご覧いただけたらと思います」という前書きで始まるのですが、さっそく事務局にアシストしていただいて始めたいと思います。いつもはこのような紙芝居を持ってあちこちで行っています。

「ぼくらは開智国民学校一年生」はじまり、はじまり。

昭和20年の春、日本軍が中国に攻め込んで15年前に始めた戦争は、アジアの国々、アメリカやイギリスなど世界の国々を相手にした第二次世界大戦に広がりました。最初のうちこそ日本は勝っていたのですが、次第に追い詰められ、今はもう負けそうになっていました。3月10日にはアメリカのB29大型爆撃機が東京の町に焼夷弾を降らせ、10万人の人たちが火の海の中で焼かれて死にました。B29は日本のあちこちの街を焼夷弾で燃やし、とうとう松本の町の空にもやってくるようになりました。近くの里山辺村にも爆弾が落ちました。そのたびに市役所の屋上のサイレンが鳴り響き、「B29がやってくるぞ、爆弾を落とすぞ、早く逃げろ」と警戒警報・空襲警報が発令されました。

その年、昭和20年の4月、ぼくたちは松本の町の真ん中、女鳥羽川沿いにある開智国民学校に入学しました。国民学校の初等科は六年、高等科は二年まで、ぼくは初等科一年三組で40人の友達と一緒にいました。入学式のとき、校長先生が白い手袋をはめて「教育勅語」という天皇陛下のお教えをお読みになり、「日本は神の国です、今は苦しい戦争をしています、きっと神風が吹いてアメリカを負かします。その日のために皆さんしっかり勉強し、体を鍛え、天皇陛下のお役に立てるよう励みなさい。」とお話されました。「はい。」とぼくたち一年生は元気に返事をしました。「♪みんなで勉強うれしいな、国民学校一年生～元気に体操いち、に、さん～国民学校一年生～饅頭もらって嬉しいな、国民学校一年生～」という歌を歌って家に帰ってきたら、近所のガキ大将に「英ちゃん、戦争ごっこやろう。お前はマッカーサーになって逃げろ。」と言われ、この戦争ごっこが始まりました。この頃子どもたちは「出てこいマッカーサー」などと言っていました。子どもたちに紙芝居を見てもらうときに、このような世界地図を貼ります。これが日本ですね。このとき子どもたちは日本がどこで戦争していたのかよく知っていて、アメリカ、中国、当時はソ連ですがロシア、インド、南米、オーストラリアとも戦争をしていました。数日前にテレビを見ていたら安倍首相がオーストラリアを表敬訪問していて、向こうの首相とお会いしたあとダーウィン市を訪ね、日本の潜水艦がこの沖で撃沈されて百何十年経つということその慰霊をされたということでした。こんなところでまで来て戦争していたのです。するとそこに、ダーウィン市の年配の女性の方がいらっしゃって、「日本軍がダーウィン市で無差別爆撃をして、そのとき1,000人が亡くなり、私の父親もそれで亡くなりました。私は今でも日本軍が憎いです。日本は子どもたちにここまで来て無差別爆撃で1,000人を殺したということを教えてください。」と言っていました。おそらくここまで来て戦争していたということは知らないと思います。日本と一緒に戦争をしていたのはドイツとイタリアです。5月頃に負けてしまい残るは日本だけとなりました。

翌日、学校の一時間目の授業は読み方、今の国語でした。「アカイアカイアサヒアサヒ、アカイアカイアサヒアサヒ…」みんなで声を合わせて教科書を読んでいると、突然空襲警報のサイレンが鳴り、遠い空にB29の爆音が聞こえてきました。ヨシコ先生が、「防空頭巾を被ってすぐに家に帰り、防空壕に隠れなさい。」と言いました。するとみんな慌てて防空頭巾を被って家に帰り、防空壕に隠れます。我が家の防空壕は縁の下の床を持ち上げて50cm程度掘っただけのものだったので、そのようなところに隠れて爆弾が防げるわけはありませんでしたが。しばらく隠れているとB29の爆音が聞こえなくなり空襲警報が解除されました。学校へ戻って算数の授業をしていると、また空襲警報が鳴りました。すぐに家に帰り防空壕に隠れました。家に防空壕がない子は、校庭のポプラの木の根元に隠れました。今日は結局、授業はできませんでした。夜でも空襲警報が鳴ります。灯火管制と言って、裸電球に黒い布や紙を下ろして、その下だけが見える状態です。窓にはカーテンを張り巡らせていましたが、そのような真っ暗な中でも空襲警報は鳴ります。サイレンが鳴り、近くの国府町の火見櫓の鐘が鳴り、そうすると町会長が歩いて回り、「すぐ隠れろ、お宅は電気が漏れているからすぐ消せ」などと言って、とても怖い思いをしました。

千歳橋から女鳥羽川に沿った道を歩いて校門に入ると、正面玄関の右手に奉安殿という小さな黒っぽい建物がありました。奉安殿には御真影といわれる天皇陛下・皇后陛下のお写真と教育勅語という天皇のお教えの巻物があり、大切に安置されているそうです。建物の前を通るとき生徒は必ず、帽子を脱いで丁寧にお辞儀をしました。「日本が早く戦争に勝ちますように、天皇陛下の御為に頑張ります」と拝むのです。この紙芝居を見た年配の人が「こんなのは頭の下げ方が足りない」と厳しいことを言っていました。「こんな下げ方をしていたら上級生が来て後ろから蹴飛ばされる」というのです。深く頭を下げたランドセルから教科書が落ちたという経験を語られる方もいました。

新五年生と新六年生が校庭に整列して開智少年団を作る式をしました。国民学校の子どもたちも兵隊さんたちに負けないよう15の訓練に励むのです。訓練の一つは、校庭を耕してじゃがいもやさつまいもを植えたりする校庭の開墾授業で、城山にも畑があり皆でそこまで行って少年団として開墾授業をしたりしました。校庭で少年団の式が終わったちょうどそのとき、サイレンが鳴って空襲警報が発令されました。ヨシコ先生が「早く家に帰って防空壕に隠れなさい」とおっしゃいました。「今日は風がうんと強い日で、もしB29が焼夷弾を落としてきたら松本の町は大火事になってしまう」と、僕はとてもとても心配でした。

今日は待ちに待った鍛錬行軍の日です。昔は「春の遠足」といったのですが、兵隊さんのように手を振って遠くの山まで歩くというもので、僕たち開智国民学校一年生は浅間の桜ヶ丘が目的地でした。六年生は牛伏寺、高等科の一年生は美鈴湖の上の渋池まで行きました。この前この紙芝居をしていて、白馬村の田中欣一先生、塩の道の研究をした日本思想史研究家の方ですが「俺は昭和16年に国民学校が始まったときに、白馬村の国民学校の六年生だった。白馬村から善光寺まで鍛錬行軍をした。」と言っていました。

今日は校庭に二カ所の防空壕を作る日です。五年生、六年生、高等学校の一・二年生の男子生徒がつるはしやシャベルで土を掘り、女子生徒はザルに土を入れて運び出していました。僕たち一年生は教室の窓から覗いていました。昔の開智は、校庭も含めて全久院というお寺があったところでした。なので、土を掘ると人骨や墓石が出てきました。けれども、少し掘ると水が湧いてきて、防空壕は役に立ちませんでした。このところ毎日のように空襲警報のサイレンが鳴るので、僕たちはやっぱり家に帰って防空壕に隠れます。

開智国民学校には、東京都世田谷区の奥沢国民学校から三年生以上の子どもたちが大勢集団疎開してきました。大空襲で家や学校を焼かれ、まだ空襲が続いている東京から、親と離れて子どもたちだけで開智国民学校に転校してきたのです。奥沢の生徒は、城山の木沢の少林寺という大きなお寺に泊まっていて、そこから学校に通っていました。親と離れて寂しいのに、そんな顔をちっとも見せずに、開智のことを元気に勉強したり遊んだりしていました。けれども、きっと夜になると寝床の中でお父さんやお母さんに会いたくてこっそり泣いていたかもしれません。

今夜は僕の家で、隣組のおじさんたちが集まって町会をやりました。「なんでも、軍艦や大砲の弾を作ったりする鉄などの金属が足りなくなって兵隊さんが困っているから、皆さんの家にある金目のものをお国のために供出なさいと市長から命令があった」と町会長さんが話されました。僕の家では、かあちゃんのおかっての釜や鍋、箆筍や仏壇の鉄の取っ手、姉さんの鉄の筆箱や文鎮、僕はブリキのおもちゃと、兄ちゃんからのお下がりの学童服の金ボタンを出すことにしました。父ちゃんは、むかし菓子屋をやっていたころの鉄板や金型を供出すると決めました。女鳥羽川の川岸にある念来寺の釣鐘も供出されて、鉄砲の弾になったそうです。今でも女鳥羽川の念来寺の鐘楼だけが松本市の文化財として残っています。6月10日の時の記念日にはスピーカーで鐘の音だけ流すそうです。開智国民学校の鉄棒・滑り台・ブランコの鉄も供出されました。

この頃六九町の女鳥羽川沿いの家々、大名町や東町の真ん中あたりの家々が取り壊されて道路になりました。B29が松本に焼夷弾を落としても大火事になって燃え広がらないように、混み入った家々を取り壊して広い空地や道路を作るのです。これを「建物疎開」と言います。今日は女鳥羽川沿いの道路を広げるため、すぐ脇にあるユウコちゃんのお店を引っ張って移動させる日です。ユウコちゃんのお店は地下室のある三階建ての昔からの喫茶店です。こんな立派な建物をどうやって持ち上げて引っ張るのでしょうか。授業が終わったので皆で見に行きました。もう工事は終わっていて、お店は元の場所から中町の通りの方へ引っ張られていました。ユウコちゃんはとても寂しそうな顔をしていました。地下室は引っ張ることができないので、元の場所で埋め戻してしまったということです。なので、翁堂の地下を掘ると銀のスプーンなどが出てくるかもしれません。今は一方通行の、縄手の対岸の立派な道になっていますが、当時は裏小路と呼ばれ、人が通ったり子どもたちが遊んだりする狭い道です。軍用道路に拡張するため、建物の取り壊しや移動が行われました。

ヨシコ先生が、「明日は皆の家の竈の煤や灰を持ってきなさい、近所の家からも集めてきなさい」とおっしゃいました。「灰をどうするの」と聞くと、「学校の白壁に塗るのです」と教えてくれました。白壁の校舎は空を飛ぶB29からとても目立つから爆撃されるかもしれない、だから目立たないように白壁を汚すのです、そういうのを「建物偽装」と言うのです、と教えてくれました。夕方、姉ちゃんや少年団、分団の人たちと一緒に近所の家々を回って「竈の灰おくれや、竈の煤おくれや」と言って集めました。翌日学校へ持って行くと、先生は「えらいたくさん集めたね」と褒めてくださいました。そして、「白亜の殿堂」と言われた開智学校の白壁が塗られました。

今日はヨシコ先生がお休みで代わりに男の先生がお見えになって、「日本で一番立派な武将は誰だと思いませんか」と聞かれました。友達は「源義経だ」「織田信長だ」「いや加藤清正だ」「真田幸村だ」と点々と言いました。僕は手を挙げて「楠木正成とその子、正行です」と言いました。先生はニコニコして、足利尊氏という悪い侍が天皇を蔑ろにしたときに、楠木正成・正行親子が後醍醐天皇を守り戦った、というお侍で今も国民から敬われています。開智の生徒も、大人になったら正成・正行のように天皇陛下に忠意を尽くして死ぬような人になりなさい。」と力強く言われました。お正月には愛国百人一首というものをやりました、その中で私が一番好きなのは正行の歌です。こたつ板の上を取札を並べて、姉が「かへらじとかねて思へば梓弓」と詠むと、私は「なき数にいる名をぞとどむる」という札を取って喜んだものです。学校に入る前からこの歌が頭の中に染みついている、70歳を過ぎた今でも今でもよく覚えています。子どもの頃に心の奥深くに教え込まれたことは、いくつになっても消えないものです。

皆さんは「赤紙」って知っていますか。家に帰って仕事をしている父親や夫、兄にこれが来るのですが、「臨時召集令状」と書いてあります。赤紙はもうほとんど残っていないのですが、今手元にあるこの赤紙には「三重県津市、第一補充陸軍歩兵に右臨時召集を令せらる、依りて左記日時到着地に参着し、この令状を以て当該召集事務所に届け出づべし」とあります。もし「松本五十連隊に来なさい」ということであれば、これを持って「ただいま参着しました」と言います。遠方の方は、乗る汽車が指定されていて、「ただし8月15日の午後1時05分津駅発の汽車に乗るべし」とまで書いてありました。切り取って出すと切符を買わずに汽車に乗れるものが付いています。これは、母親大会を行う母親たちが、12月8日に駅前で高校生に配っている赤紙です。

お父さんやお兄さんに赤紙が来ると、どんな事情があっても兵隊となって戦争に行かなければなりません。市役所や役場の兵事系の係員が、夜中でも早朝でも「おめでとうございませ、赤紙です」と言って届けに来ます。学校の先生でも、家に小さな子どもや病人がいる人でも、一家の大黒柱となって働くお父さんに、開智国民学校のウスイ先生もコミヤマ先生も、タケウチ先生もフクダ先生も、赤紙が来て次々出征していきました。僕たちは校門のところに並んで戦争に行く先生たちを「万歳！万歳！」と言って日の丸を振ってお見送りしました。友達のお父さんにも赤紙が来ました。ミチコさんのお父さん、マサコさ

んのお父さん、カツコさんのお父さん、イサムくんのお父さん、ノブトくんのお父さん、タダシくんのお兄さん、近所の肉屋のお兄ちゃん、自転車屋のお兄ちゃん、魚屋のお父さん、僕の親戚のおじさんが6人、従兄のお兄さんが3人、みんなみんな赤紙が来て、兵隊さんになって出征していきました。従姉のお姉ちゃんも従軍看護婦になって出征していきました。日赤の看護婦でした。従軍看護婦として行くときは、その人にも赤紙が来ます。「最後のおっぱい飲ませて母は出征し」という句を残して出征した看護婦のお母さんがいたそうです。三年生のアキコさんと一年生の弟ツヨシくんのお兄さんにも赤紙が来たそうです。アキコさんとツヨシくんは東京で空襲に遭って松本の中町に疎開してきていました。お母さんは大病を患っていてほとんど寝床で寝たきりです。お母さんに代わって三年生のアキコさんが家事をしたりお医者さんにお薬をもらったりしていました。お父さんは東京に残って軍需用工場で働いていました。昭和20年3月の初め、そのお父さんにも赤紙が来ました。病気で死にそうなお母さんと小さな子どもを二人残して戦争に行くお父さんの気持ちはどうだったでしょうか。一旦家に帰って妻や子に会って、そして千葉連隊に出征していったそうです。6月にお母さんは亡くなり、国民学校三年生のアキコさんと弟のツヨシくんは孤児になって親戚に引き取られていきました。戦争が終わってもお父さんは帰ってきませんでした。戦争孤児になってしまったアキコさんは中川村（現四賀中川）のお母さんの実家へ、ツヨシくんはさらに山奥の陸郷村のお父さんの実家へ引き取られ、離れ離れになってしまいました。弟に会いたくて会いたくて、三年生のアキコさんは夕方の暗い山道をおじいさんが編んだ藁の草履を履いて一人で12kmも歩いて会いに行ったそうです。長野県の民生部長から兄弟に正式な戦死公告が届いたのは、戦争が終わってから4年後の、昭和24年の5月でした。アキコさんは中学一年生、ツヨシくんは小学五年生でした。戦死公告にはただ、「コバヤシミキオ34歳、昭和20年8月12日、満州国興安北省ハイラル第二陣地にて戦死」と書いてあるだけでした。そして箱には父さんの名前を書いた紙切れが入っているだけでした。ハイラル基地というのはソ連と満州の国境最前線で、そこに攻め込んできたのです。兵隊さんになって戦場へ行ったお父さんやお兄さんは、中国の陸地で、南方の島々で、太平洋の海の上で、硫黄島や沖縄で戦い、多くの兵隊さんが戦死しました。特攻隊として飛び立った飛行機が撃ち落されて戦死したお兄さんたちもいました。戦死した兵隊さんたちは英霊となって故郷の家に帰ってきます。お骨は白木の箱に入れられて松本駅に降り立ちます。国民学校少年団の生徒や町内会、在郷軍人会や国防婦人会、青年団の大人たちと一緒に、その度に松本駅にお迎えに行き町の通りに整列して、白木の箱を胸に抱いた家族の列をお迎えしました。これを「英霊出迎え」「弔迎（チョウゲイ・チヨウレイ）」と言いました。

この頃弔迎に行くことがとても増えました。日ノ出町のコバヤシ陸軍一等兵、六九町のミムラ陸軍将兵、博労町のモリシタ陸軍兵曹、神明町のマツシタ海軍二等兵曹、新伊勢町のオオノ陸軍上等兵、伊勢町のキリハラ海軍上等水兵、六九町のカトウ陸軍将兵、飯田町のフジモト陸軍将兵、新伊勢町のコガラシ陸軍伍長、海軍軍属（おそらく従軍看護婦）ト

ドリキヤスコ、他にも大勢の英霊たちをお迎えしました。開智国民学校の教師が書いた日誌に「今日は～の弔迎に行った」と名前が書いてあるため、これらの名前が分かりました。松本駅から新伊勢町の通りを、三年生のりゅうちゃんが胸に白木の箱を抱いて先頭に立ち、みっちゃん、のりちゃん、こうちゃんの兄弟が続ぎ、一番後ろにはまだ赤ん坊のゆりちゃんを抱いたお母さんが歩いて行きました。いつもガキ大将のりゅうちゃんが泣きそうな顔をしてまっすぐ前を向いて歩いて行きました。お母さんはゆりちゃんを抱いて怖い顔をして歩いて行きました。何もわからない赤ん坊のゆりちゃんはにこにこ笑って僕たちを見ていました。

近所の高等科二年のヒロちゃんが今井・笹賀・神林村のあたりにできた陸軍飛行場に勤労奉仕に行った話を聞かせてくれました。飛行場を作るために高等科以上の生徒は勤労働員されました。一日働くと米一合がもらえました。「米のないときは『よく稼いでくれた』と、かあちゃんが褒めてくれただよ」とヒロちゃんは言っていました。飛行場には「赤とんぼ」と呼ばれる戦闘機の練習機が5、6機あり、翼に木を使ってある危なっかしい練習機でした。若い特攻隊の隊員たちが操縦の訓練をしていました。飛行場の空地に敷いた大きな布を太平洋に向かうアメリカの軍艦に見立て、体当たりして沈没をさせる急降下の訓練をしていました。特攻隊の隊員たちは、町中の旅館や浅間の温泉宿に泊っていました。松本駅から浅間温泉に行くにはチンチン電車に乗るのですが、特攻隊員が手を上げるとチンチン電車は停留所でもないところで停まって乗せていきました。ネッカチーフを巻き軍刀を下げた特攻隊に憧れていたヒロちゃんは、「や、英ちゃ、特攻隊員ってかっこいいぞ、俺も少年兵に志願して特攻隊になるぞ」と言いました。

僕たちの遊び場は、小路を入ったお社の空き地です。いつの頃からか、夕方になると白衣を着て戦闘帽を被った傷痕軍人がやってきて、空き地の隅っこにある石に座ってぼんやりしています。どこかの戦争で負傷したらしく、片方の足が不自由で松葉づえをつけていました。近所の人は、「あの傷痕軍人のショウイチさんは、開智学校を卒業し松本中学、松本高等学校、仙台の大学に行ったとても頭のよい人なのだけれど、学徒出陣で中国の戦争に行っ、敵の鉄砲に当たって大けがをして帰ってきた」と言っていました。ショウイチさんは石に座って、僕たちが遊んでいるところをただぼんやり見ているだけです。ときどき何かブツブツ言っていますが、何を言っているのか、何を考えているのかわかりません。夕暮れになって僕たちが帰ろうとする頃、辺りに落ちている木の枝を拾って地面に何か書き始めます。円や三角形を書いてそこに線を引いたり、難しそうな算数の式を書いたりしています。書いては消し、また書いては消して、ブツブツ言いながら夢中になってやっています。大学で勉強していたことを思い出して問題を解いているのかもしれませんが。近所の人たちは「かわいそうに、ショウイチさんは中国でおっかないものを見てしまったに違いないねえ」と言っていました。

日本と一緒に世界と戦っていたドイツとイタリアが降伏して、ヨーロッパの戦争は終わりました。今、世界を相手に戦っているのは日本だけでした。校庭での朝会のとき、校長

先生が、沖縄を守っていた日本軍の兵隊さんの話をされました。「今日の発表によれば、沖縄を守備していた陸軍部隊は全員敵陣に突入し、玉砕しました。全島民もこれに協力して戦い、たくさんの人たちが死にました。沖縄を占領したアメリカ軍は、いよいよ日本本土に上陸してきます。待ちに待った本土決戦が始まります。しかし日本は、神様が守ってくれる国です。必ず神風が吹いて、アメリカ軍を海に叩き落とすでしょう。小国民の皆さんも、本土決戦に備えて一層勉強し、体を鍛え勤労奉仕に励み、お国のために力を合わせましょう。」とのことでした。「はい！」と僕たちは元気に返事をし、その気持ちを表すため、天皇陛下のおはします東京の方に向かって宮城遥拝のお辞儀をしました。

午後、かあちゃんが町の防火演習だと言って、もんぺにエプロンをしてバケツを持って出かけて行きました。B29が焼夷弾を落としても大火事にならないように、バケツリレーで水を運び火事を消す訓練です。それぞれの家の前にある防火用水からバケツで汲んだ水をリレーして運びます。はしごの上に運び上げたバケツの水を、おじさんたちが勢いよく、何杯も何杯も屋根にかけていきます。僕たちは面白がって遠くから見物していました。といっても、何十人もの手を通じて屋根の上に運ばれるので、おじさんの手元にバケツが届いたころには水はあまりありませんでした。気休めの防火訓練でした。訓練から帰ってきたかあちゃんは、腰が痛いと言いながら「家の前の防火用水の水が空になったからいっぱいにしておきなさい」と言いました。僕と姉ちゃんは近くの川から水を運び、防火用水をいっぱいにしました。「我が家の防火用水にこれだけ水を溜めておけば、焼夷弾が落ちてでも安心だ」と思いました。すると、「開智国民学校は町の真ん中であって最初に空襲に遭うので、夜の間だけでも疎開しなさい」ということで、私は五年生の姉ちゃんと電車に乗って、新村にある父親の実家に夜間疎開をしました。一晩そこに泊まり、朝いちばんの電車に乗って帰ってきます。母親は「朝これを食べながら駅に行きなさい」といり豆を20粒持たせました。日曜日の朝は急いで帰る必要はないので、姉ちゃんと一緒に、死んだ兄ちゃんと弟のお墓がある千昌寺のお墓に行きました。私の兄は国民学校四年生のとき3日ほど学校を休んで昭和17年1月20日に、弟は生後間もなく亡くなってしまいました。お墓といっても手ごろな石が地面に置いてあるだけですが、いり豆をお供えして二人で手を合わせて思いました。「何を拝んだのか」といり豆を食べながら姉ちゃんが聞くので、「早く飛行機乗りになってB29を撃ち落してやるから、兄ちゃん見てて」と拝んだと答えました。「姉ちゃんは？」と聞くと、「早く日本が戦争に勝つといいね、と拝んだ。だってそうすれば明るい電気の下で父ちゃんや母ちゃんと一緒に夕ご飯が食べられるもの」と答えました。その日曜日の朝はB29の影もなくアルプスの空はきれいに晴れ渡っていました。

しばらくすると、「もう疎開したきりにしなさい」と言われました。つまり縁故疎開です。私は小野村（現在の辰野町小野）に疎開することになりました。父ちゃんは町に一人残って軍需工場に働きに出ます。一年三組の友達も田舎の親戚を頼って疎開して行きました。白馬村、今井、中林、田沢、島内、豊村、有明村、木曾、入山辺、朝日村、小倉村、生坂村などです。田舎に親戚がないため疎開できずに残った子もいました。そして皆離れ離

れになりました。小野村のおじさんの家は農家で、馬やニワトリを飼っていました。周りには田んぼが少しと、中央線の線路を隔てた裏山に山畑がありました。おじさん、おばさん、小野国民学校高等科二年のお姉さんの3人家族でした。上のお兄さん2人は戦争に行っていていませんでした。囲炉裏のある部屋の隣を二竿の箆で仕切ってきた、三畳ほどの部屋が僕たちの寝る部屋でした。母ちゃんは人手の足りないおじさんたちを助けて田んぼや山畑で働きました。僕たちも小野のお姉さんに連れられて、山畑で草取りや石拾いをしました。農作業に疲れて寝転がっていると、頭の上をB29が白線を描いて飛んでいきます。田舎の山の中で見るB29はとてもキラキラしていて綺麗でした。けれども今頃は、松本では空襲警報のサイレンが鳴っているでしょう。疎開してきた翌日、僕は小野国民学校に転校しました。小野国民学校には、東京から疎開してきた子と村の子の二つのグループがあり、そこに私が松本からポツンと来たので、どちらの仲間にもなれず一人で鉄棒をして遊んでいました。

8月になりました。おじさんが新聞を広げて「広島に恐ろしい爆弾が落とされた。たくさんの方が焼け死んで家が壊れた。ソ連が中立条約を破って日本に宣戦布告し、満州に攻め込んできた。長崎にも恐ろしい爆弾が落ちて大勢の人が死んだ。」と教えてくれました。「いよいよ本土決戦だ」と思いました。8月13日には、「ついに我が信州の長野と上田にアメリカの航空母艦から飛び立った70機のグラマン戦闘機が来襲し、何人もの人が撃たれて死んだらいい」と教えてくれました。長野では30人の死者が出たそうです。「長野と上田の次は松本だろうな」とおじさんは言いました。そして昭和20年8月15日がきました。お昼に天皇陛下がご自分の声で重要な玉音放送をされるということで山の畑から帰ってきました。座敷の縁側にラジオを置いて、居間に家族全員が揃いました。近所の家からも放送を聞きに来ました。皆姿勢を正し、気を付けをして放送を待ちました。正午になり、おじさんがスイッチを入れました。ラジオから天皇陛下の初めて聞くお声が聞こえるはずでした。けれどもどうしたのか、ラジオは雑音が流れるだけで天皇のお声はよく聞こえませんでした。玉音放送が終わりました。昔軍隊に行って手柄を立てたという近所のおじさんが、「これはいよいよ本土決戦だから、竹やりを持ってアメリカ軍と最後まで勇敢に戦えということではないか」と言いました。誰も返事をしませんでした。小野のおじさんが「『耐えがたきを耐え、忍びがたきを忍びて』というところだけ聞こえた。これは戦争に負けたということではないか」と言いました。大人はぼおとして何も言いませんでした。小野のお姉さんが、「戦争が終わったのなら戦争に行っている兄ちゃん二人も帰ってくるのかな」とつぶやきました。「本当に戦争が終わったなら松本に帰れるね」と姉ちゃんが小声で言いました。「もう空襲警報も爆撃もないのかな、神風が吹かないうちに本当に負けてしまったのかな」。僕には日本が戦争に負けてしまったというのがよく分かりませんでした。それよりも、お昼を過ぎたので急にお腹が空いてたまりませんでした。さっき山畑から取って井戸で冷やしておいたスイカやトマトにかぶりつきたくなりました。そのときようやく、家の周りの木でお盆を過ぎたセミたちがうるさいくらい鳴いていることに気づきました。

た。その翌日から、家のすぐ後ろの中央線を、故郷の家に帰る兵隊さんたちを大勢乗せた汽車が蒸気機関車に引っ張られて次々と通り過ぎていきました。踏切に立って手を振ると、窓から身を乗り出して兵隊さんたちも手を振ってくれました。「本当に戦争が終わったのだ」と僕は思いました。小野のお兄さんも、大きなリュックサックを背負って「ただいま戻りました」と言って無事に帰ってきました。その翌朝から、鉄砲を握っていた手に鍬を持って山の畑に出かけて行きました。その後すぐに松本に帰ろうと思っていたのですが、姉が鎌で手を切ってしまったところが化膿しリンパ腺が腫れて熱が出てしまい、小野のおじさんが町の唯一の医者連れて行ってくれました。戦争のとき軍医をしていたので、乱暴ですが腕は良い先生です。こんな時代ですから、麻酔がない状態で施術をしなければなりません。こういう事情で、松本に帰るのが遅れました。

夏休みが終わって二学期が始まったころ、僕は疎開先の小野の家から松本の家に戻ってきました。松本にはもうB29は飛んできません。空襲警報のサイレンも鳴りません。久しぶりに父ちゃん、母ちゃん、姉ちゃん、僕の家族4人が揃いました。明るい電灯の下で家族みんなで夕ご飯が食べられるなんて、夜は防空壕に逃げ込むことなくぐっすり布団の上で眠れるなんて、「平和っていいな」と僕はしみじみ思いました。ヨシコ先生が、「皆元気に帰ってきたので、これから仲よく勉強しましょうね」と嬉しそうに仰いました。けれども、戦争から帰ってこないお父さんたちもいました。マサコさん、ミチコさん、カズコさん、イサムくんのお父さん、東京から疎開してきていたアキコさんとツヨシくんのお父さんです。駅前で大きなお店をやっていたミチコさんの家には、新しいお父さんがきました。校庭に掘られた防空壕は埋め戻されました。校舎の白壁に塗りたくった竈の煤や灰の色はしばらくそのままでした。まだ新しい教科書がこないのも戦争のことが書いてあるページに墨を塗った墨塗り教科書で勉強することになりました。松本の空を覆っていた「戦争」という名の黒い雲は吹き払われました。そして9月、開智の講堂の高いポプラの木々の上には、美ヶ原からアルプスの峰々まで秋の始めの青い青い空が広がっていました。

おしまい

開智国民学校の奉安殿は昭和18年まで写真に写っている場所にありましたが、それ以後は開智の講堂の教壇の上に「奉安庫」という形で移され用いられたと思います。奉安殿に入れられていたものは6つほどあるのですが、一つは天皇皇后両陛下の御真影です。「現人神」として祀られて、奉安殿の中に収められていました。もう一つは教育勅語です。12の徳目が書いてあり、「一度戦争になれば勇敢に戦い、神武天皇以来続いてきた天皇家を助けなさい。この道は私（天皇）も臣民も共に守らねばならないものであり、国の内外を問わない道理です。私（天皇）も臣民も常にこの教えを心に抱き、皆が一つになって立派な行いをしていくことを望みます。 明治二三年十月三十日 御名 御璽」とあります。この教育勅語が明治天皇から総理大臣に手渡されたときは、御名のところには「睦仁」と

書かれ、御璽のところには天皇の印が押されていましたが、各学校に配付するときに御名・御璽に変えたそうです。この教育勅語がどうやってできたのかということですが、資料7～10ページは、松本の女性が中心となって2ヶ月に1回出している「ニューズレター 平和の種」という冊子の、11月11日発行の最新号に載っていた記事をそのまま転載したものです。8ページの上にあります。教育勅語が發布されたのは、1890（明治23）年10月30日です。前年に大日本帝国憲法發布、翌年に第1回帝国議会招集、そのすぐあとに教育勅語發布されており、大日本帝国憲法と教育勅語は表裏一体なのです。大日本帝国憲法は、天皇が定めて臣民に与えた「欽定憲法」と言われていますが、よく知られているように、「第1章天皇 第1条 大日本帝国ハ万世一系ノ天皇之ヲ統治ス」「第3条 天皇ハ神聖ニシテ侵スヘカラス」「第4条 天皇ハ国ノ元首ニシテ統治権ヲ総攬シ…」「第11条 天皇ハ陸海軍ヲ統帥ス」と、万世一系の天皇の絶対権力を規定したものです。けれども、憲法で絶対権力であると規定し、「天皇はこれほど偉いものだから言うことを聞きなさい」という支配者と被支配者の関係では、世界のどこの国を見ても何が起こるかわからないのです。だから日本の場合、万世一系の、神武以来の百代、百何十代の天皇皆の徳があって、そして国民にいろいろな教えを説いて聞かせた優しい父親であるということ、国民、特に子どもたちに教えなければならないということで、この教育勅語ができました。そして、教育勅語ができて天皇皇后の写真と共に全国の各学校に下賜されて、奉安殿に祀られて、いろいろな式典のときにこれを読み上げなさいということになっていました。

その次に『初等科修身 四』という昭和18年に使われたものですが、表紙を開けると真っ先に教育勅語があります。そして、教育勅語は何を説いているのかを子どもたちに優しく教えるのが第1章「大御心の奉體」です（資料12ページ）。国民学校四年生の子どもたちに教育勅語を優しく説いて教えているのです。資料13ページの終わりから「一旦緩急アレハ義勇公ニ奉シ以テ天壤無窮ノ皇運ヲ扶翼スヘシ…とのたまはせられました。」とありますが、この部分を子どもたちにどのように教えているのかというと、「いつたん國に事ある場合には勇氣をふるひおこして、命をささげ、君國のためにつくさなければなりません。」「一旦戦争になれば勇氣を奮い起こして命を捧げ天皇のために尽くしなさい」と教えています。では、実際にこの教育勅語が学校でどのように読まれたのか、資料16・17ページに書いてあります。智里東（現 阿智村）国民学校の田中崇夫さんの作文です。

奉安殿といえば国民学校、国民学校といえば奉安殿、それは私の場合、天皇陛下と、戦争につながってしまいます。

奉安殿は、校庭の東の隅…石垣で四方を囲み、まわりには柵がありました。白壁の土蔵作りの建物で、そのまわりにはひのき、松、などが植えてありました。まわりの建物はみすばらしいのに比べて、緑の中で、その白壁の白さがひときわ引き立って見え、侵してはならない荘厳な雰囲気、漂わせていました。

ぶ厚い扉には、大きな黒い錠前がついていて、その錠前は年に何回かの式典以外は、

堅く閉ざされていました。

奉安殿には、天皇陛下と皇后陛下の御真影と教育勅語が納められていて、・・・奉安殿にまつわる式典には「拝賀式」(元旦)、「紀元節」(2月11日 神武天皇即位の日)、「天長節」(天皇誕生日4月29日)、「明治節」(11月3日 明治天皇誕生日)、「大詔奉戴式」(日米開戦の12月8日にちなんで毎月8日)などがありました。このようなときに御真影と教育勅語を取り出してきました。

式典は、体操場の教壇の上に、白い布を張り巡らし、にわか作りの祭壇を設けて行われました。…

勅語は、黒塗りの盆に載せられて、教頭先生が頭上高く捧げ持たれて、しずしずと入場して正装して壇上に待つ校長先生に渡されました。校長先生はそれを受け取ってテーブルの上に置き、いったん降壇します。奉読の時は、再び壇上に進み、桐の箱の紐をほどいてふたを取り、包みを取り出して机の上に置き、くるんである紫色の布を開いて勅語を取り出しました。その扱いは、真っ白な手袋と、もの音ひとつさせない、触れてはいけないものに、あえて触れさせていただくといった、丁寧このうえない扱いでした。…校長先生が今やっていることは、大変大切なことをしているのだと、先生の一挙一動に見入っていました。

いよいよ勅語の巻き紐をほどいて広げ、おもむろに奉読が始まります。「チンオモウニワガコウソコウソ…」、来賓、先生、生徒一同は頭を深く下げて聞きました。校長先生のゆったりとして、しかも重々しい声と静肅なその場の雰囲気から、言葉の意味なんて皆目わかりませんでした。何か尊いおさとしを聞く思いで聞きました、しかし、頭を下げたままの不動の姿勢なので、やがて体も疲れるし、嫌になりました。中には、足悪さや手悪さをする者もいました。私は、先生のお読みになるその勅語がぶるぶる震えているのを見ながら、今、行っていることは大変大事なことなんだろうと想像していました。程なく最後の言葉「ギョメイギョジ」となって、みんなほっとした思いで頭を上げました。ほんの短い時間だったでしょうが、その時間のながく感じたこと。

次のページ、天皇機関説と国体明徴運動ですが、昭和10年に美濃部達吉の「天皇機関説」が不敬であるとして帝国議会で問題化し、不適切なことを説いた本は発禁処分となり、美濃部達吉は貴族院議員を辞職します。これを契機に岡田啓介内閣は国体明徴声明を出しました。その趣旨は、「我国における統治権に主体が、天皇にましますことは我が国体の本義にして帝国臣民の絶対不動の信念なり…天皇機関説は神聖なる我国体に悖りその本義を謬るの甚だしきもの…政府は右の信念に基づき、国体観念をますます明徴ならしめ、その実績を収むる為全幅の力を尽くさんことを期す」と言って、国体明徴運動が始まります。これにより、教育勅語が納められている奉安殿が一層神格化されました。その後、昭和12年には日中戦争や国民精神総動員運動が起こり、昭和13年には国家総動員法が公布されました。ここでは国民徴用令が朝鮮半島でも適用され、白紙徴用といって工場に動員

されました。他にも金属回収令など30余の勅令が出されました。これは政府に独裁的な権限を与え、生産・労力・生活を戦争遂行に総動員する法律と勅令～日本（植民地朝鮮も）の全土・全資源・全国民を長期化する戦争遂行に総動員するものでした。そして昭和15年に町内会・常会（隣組）が設けられ、それを通じて国民の中に浸透させていきました。10月には大政翼賛会が設立され、下部組織として大日本青少年団体が結成されました。開智国民学校少年団もこの一つなのです。昭和16年には国民学校令が公布され、「皇国の道に則りて初等普通教育を施し国民の基礎的錬成を為す」と規定されました。「基礎的錬成」は国民学校の謳い文句でした。4月1日にこれまでの尋常小学校初等科（6年）、高等科（2年）をそれぞれ国民学校初等科・高等科に改組し、戦後の1947（昭和22）年3月まで6年間続いたあと、新制中学に移行していきました。1941年には太平洋戦争が開戦し、そのときに天皇が発した「米国及英国に対する宣戦の詔書」を奉安殿に納め、以後毎月8日は戦勝を祈念して「大詔奉戴日」の記念式を行いました。そして昭和17年には、各学校で「陸海軍に飛行機を献納しよう」ということで、松本市開智国民学校長一志茂樹が児童保護者各位に向けて、児童一人金五銭見当、全国総計65万6千円を募集する通知を出しました。これは今でいえば一種の強制寄附です。加えて、奉安殿にある御真影や教育勅語をより浸透させるために「開智国民学校児童の生活指導に関する実践的研究」という、原本は謄写版印刷40数頁にも及ぶ一志茂樹校長のもとでの綿密な指導計画が行われました。

国民学校の児童の指導精神

大東亜戦争を完遂し八紘一宇の大精神を宇内に宣掲し同義に基づく大東亜新秩序を建設することは我が国刻下の大理想である。・・・国民学校に於ては大東亜の中核をなす皇国民の基礎的錬成をなし、大東亜の指導者としての資質を啓培することに根本精神がある。即ち国民学校児童の生活指導に於ては左記（次の）事項を以てその根本精神とし指導の達成を図らなければならない。

（一）教育に関する勅語の精神を奉戴して国体の本義に徹せしめ皇国民たるの資質を錬成すること

1 国体に対する信念を強め義勇奉公の精神を錬成すること

（A）皇室崇拝

- 御真影
 - ・（奉安殿の）奉開奉閉の際には最敬礼を行うこと
 - ・奉持を拝したる時は直ちに其の場に停止して最敬礼をなし、目迎目送のこと
 - ・崇敬の真を尽くさしめること
- 勅語 勅旨
 - ・勅語・詔書の奉読の際には敬虔なる態度を持せしめること
 - ・勅語・詔書の謹写・謹解をなさしむ

- 奉安殿
 - ・御勅旨に添い奉らんことを期せしむ
 - ・学校中もっとも神聖なる地域を以て教育の中心を此処に置く
 - ・登校・下校の際には必ず殿前に於て最敬礼をなさしむ
 - ・初一入学式当日、初六卒業式当日奉読せしむ
 - ・奉安殿の清掃は職員毎週之を行う
 - ・初六児童をして毎日謹みて周囲を清掃せしむると共にその付近を取乱さず遊戯せざるよう注意せしむること
 - ・他校の奉安殿に対しても亦自校に於けると同様の礼法を守らしむこと
- 明治天皇
 - ・歩行通過の際は停止し拝礼をなすこと
 - 行幸玉座室
 - ・御臨幸の光栄を常に肝銘させておくこと
 - ・初一入学式、初六卒業式当日奉拝せしむること
 - ・清掃は職員にて之をなす
- 宮城遥拝
 - ・極めて敬虔の念を以て行はしむる
 - ▽毎朝洗面後必ず行わしむる
- 神宮遥拝
 - ・毎週月曜日朝会の際実施す
- 国旗
 - ・意義を明らかにし国旗に対する礼法及び取扱い方の指導をなすこと
 - ▽家庭に於ける国旗掲揚は成るべく児童をして行はしむること
- 国歌
 - ・意義を明らかにし歌う時、聞く時共に敬虔の態度を持たしむること
- 海行かば
 - ・朝会の際これを歌はしむ
- 御尊影
 - ▽新聞雑誌等に掲載されたる皇室に関する御尊影は特にその取扱いに注意せしむること

(▽は家庭において行わせしむるもの)

金釦の供出が昭和18年に行われました。(資料19ページにあるのは)一志校長先生が金釦を出すよう各家庭に通知を出して、「その結果これだけの金釦が供出されたので代わりにボタンをください」ということで松本市長宛てに出した書類です。表には「1ノ1 前ボタン360、袖ボタン132、計492」とありますが、学童服の前には5つ、袖には2つずつボタンが付いていました。これが1年1組で、「2組270、3組412…」と続き、全校では13,700個の金釦を開智から供出したので木製などの代わりにボタンをください、というものでした。このとき開智からは他にも、「御聖蹟の金属供出」ということで、奉安殿の門戸や記念碑はめ込みの銅板、周辺の鉄鎖や鉄棒まで供出しました。それ

で講堂に御真影が移されたのだと思います。それから、三村寿八郎という20年間も開智の校長先生を務めていた方の銅像、学校で使用中の飯盒や水筒のアルミニウム、滑り台、鉄棒、綱引きの引綱も供出しました。

次に私の姉の日記と開智国民学校日誌についてです。姉の日誌は開智に寄贈しました。

大詔奉戴日

○手塚佳子日記～昭和20年4月8日 日 晴～

今日は大詔奉戴日だ。日曜日だけれども式だけやりに行った。朝私が顔を洗っている時に、お母さんが今日は花祭りもありますとおっしゃった。いつもなら天神でおちごの人達が舞を舞うわけですが、今年はそんなに遊んでいてはいけないのでやらなんだ。午後五時にはラジオで大本営発表があった。敵の航空母艦二隻、巡洋艦一隻、艦種ふしょう六隻、くちく（駆逐）艦一隻、ゆそう（輸送）船五隻撃沈、げきは（撃破）は戦艦三隻、巡洋艦三隻、船種ふしょう（不詳）六隻、ゆそう船七隻をげきはした。この発表をきいて私はほんとうにありがたかった。

○開智国民学校日誌（同日）

第四十四回大詔奉戴日 午前八時半 式後全校児童忠霊室及四柱神社参拝

警戒警報 空襲警報～昭和20年4月4日 7日 12日 13日…と記述多し

○手塚佳子日記（4月12日 木 晴風強し）

今日の朝学校でお掃除がおわったら警戒警報のさいれんがなったので、斉藤先生にいうと早く帰りなさいとおっしゃったので、私たちはすぐに帰った。家に帰って防空の用意をしているとお昼ごろ解除になったので学校に行った。少し遊んでお掃除に取りかかった。少したつとまた警戒警報になったのでまた家に帰った。解除になってから学校へ行った。今日は掃除の時に下駄箱を教室の前にうつした。警戒警報の時にすぐはき物を持って逃げられるようにしたのだ。今日は警戒警報が二度もあったので時（授）業がつぶれてしまった。

○開智国民学校日誌

警戒警報発令 第一回 八時半 解除十一時半 第二回 午後一時 解除午後二時半・・・英霊出迎（初等四ノ二） 陸軍一等兵小林仲人（日出町出身）

空襲・警戒警報はどのように鳴ったのかが、開智学校が所蔵する「昭和18年3月の回覧板」にあります。以下の伝達方式が回覧板で市民に周知されました。

○警戒警報

*サイレン _____（3分連続吹鳴）

*半 鐘 ●●-●●-●●-●●-●●-●●-●●-●●-●●-●●

○空襲警報

*サイレン — — — — — (4秒吹鳴 8秒休止 10回連続吹鳴)

*半 鐘 ●●-●-●-●●●●-●-●-●

防空壕掘り

○手塚佳子日記 (4月17日 火 晴)

今日も学校で防空壕ほりをした。もうなからほれていた。私達は自分の番がまわってくるまで、小さな防空壕をほって遊んでいた。今日はへいたいさんの英霊を迎えたそれは六九町の坂井という家の人だ。私はほんとうにすまないとしみじみかんじた。

○開智学校日誌 (同日 晴)

英霊弔迎(初三以上) 故陸軍少尉 三村計夫殿(六九町出身) 防空壕掘りヲ為ス(第二時ヨリ) 初五以上壕掘り 初四以下石拾イ

天長節

○手塚佳子日記 (4月28日 土 晴)

今日学校で朝礼の時に明日の式(天長節=昭和天皇誕生日)の練習をした。最敬礼の練習や校長先生がおとびら(講堂の講壇背後の奉安庫)をお明けになる時の練習をし、唱歌の練習をしたりした。

○手塚佳子日記 (4月29日 日 晴)

今日はおめでたい天長節だ。今日は今の天皇陛下がお生まれあそばされた日だ。今日は校長先生がおいでにならなかったのが高津先生が代わりになってお勅語をおよみになった。

○開智学校日誌 (同日 晴)

校長長野出張(長野聯隊区司令部へ)

謹奉賀天長節 今上天皇陛下第四拾四回御誕生日

天良ク晴レ聖寿ノ万歳ヲ寿グガ如シ

一志校長昭和十九年度少年兵召募ニ関シ市教育会長トシ顯著ナル功勞ヲ樹テルヲ以テ長野聯隊区司令部ヨリ表彰サル

開智の資料に、このとき開智の高等科二年の男子生徒をどれだけ少年志願兵に受験させたかという記事があるので、調べてみました。

各種少年兵志願者調ノ報告 昭和20年5月25日

松本市教育課長殿

松本市開智国民学校校長 一志茂樹

標記ノ件左記ノ通り及御報告候也

校名	高二男 在籍	陸軍志 願者	第一次 合格	第二次 合格	海軍志 願者	第一次 合格	第二次 合格	合計
開智	32	5	4	1	11	5	3	4

開智国民学校高等科二年には32名の男子が在籍していました。陸軍志願者は5名で、そのうち第一次合格者は4名、第二次合格者は1名でした。海軍志願者は11名で、第一次合格者は5名、第二次合格者は3名でした。陸軍・海軍を合わせると最終合格者は4名でした。つまり、開智国民学校高等科二年に在籍する男子の半数にあたる16名が志願している（させられている）状況です。これは満蒙開拓の義勇軍と同じで、各学校に「この人数を志願させなさい」という割り当てがあり、さらにその中で、校長や教師が生徒に志願するよう言うのです。旧開智学校に見学に来たかなり年配の男性が、学芸員に「俺もこのとき志願させられて試験を受けた。海軍を受けたが『陸軍が足りないから陸軍に変更しろ』と教室中を追い掛け回された」と言っていたそうです。昭和20年に戦争に出ていくということはそのあとどういう運命が待ち受けているか、校長先生は知っていたと思います。けれども「志願しろ」と言ったのです。

この前「第30回平和のための信州戦争展」というものが松本でありまして、そのとき少年兵に志願した清水英夫さんという方のお話がありました。なぜ高等科を卒業して少年兵を志願したのかというと、経緯は先生の推薦だったそうです。「内容は知らされず、場所はハルピンとだけ聞き、ただの見習い技術員として採用されました。昭和二十年三月、国民学校高等科を卒業後三日でハルピンに向かいました。入隊は十四歳。同期は三十四名、うち伊那からは十一名でした。すると、連れられてきた先は731部隊で、ロシア人・中国人のマルタ（捕虜）で人体実験をし、特設監獄のマルタの死体片付けなどをさせられました。自らも人体実験させられた可能性があります。帰ってくるときは、部隊での事件は一切口外してはいけないと言われ、今まで体験を語ったことはありませんでした。軍歴資格保証給料通帳は証拠焼却ということで取り上げられてしまい、軍隊にいたという証明をどこもしてくれません。」とっていました。

最後ですが、昭和20年7月6日の午後11時47分から翌7日午前1時35分の約2時間にわたって、アメリカ軍機B29の編隊131機による甲府大空襲がありました。死亡者は1,127人、負傷者は1,239人でした。資料24ページに開智国民学校日誌を載せていますが、7月6日に甲府大空襲があったことが書かれ、7月18日には一志茂樹校長が「次は松本だ」ということで状況を見に甲府に行ったと書かれています。そして7

月28日には「御真影及勅語謄本奉還 東筑、筑摩地村国民学校へ校長奉護シテ同地へ行カル」とあり、どのようにして筑摩地村に送っていったのか以下のように事細かに書かれています。

一志校長松本駅発午後三時二十八分ノ列車ノ二等室ニ乗り、御真影並勅語謄本…ヲ奉安シ…小野駅ニ向フ…小野駅御着後小野神社ノ唐櫃ニ奉安シテ 筑摩地村青年学校生徒四名ニテ吊担キ奉ツリテ…筑摩地国民学校ニ御安着ス

(一志校長は) 毎週金曜日ニハ筑摩地校ニ赴キ御真影並勅語ヲ奉伺スルコト

8月15日の日記には

一、昭和十六年十二月以来約三年ハヶ月ニ亘ル大東亜戦争ニ対シ遂ニ終結ノ聖断下ル。本日正午ヲ期シ 天皇陛下ニ於オカセラレハ全国ニ向ッテラヂオヲ以テ親シク「大戦終決ノ玉音放送」ヲ遊バサル。 聖慮高遠唯々^{ただただおそれお}畏シ極ミナリ。全職員參集職員室ニテ…御放送ヲ拝聴ス。全職員^{ただ}唯事ノ余マリノ意外ナルト悲痛至極ナル終決ニ慟哭ス^{ああ} 噫万事ハ終レリ 我等只々^{ただただ}言フベキ言葉ヲ知ラズ

とあり、あれだけ「戦争、戦争」と言って子どもに教えていた教師は糸が切れてしまったようです。翌日の16日、さらに17日、18日には「特記スベキコトナシ 植樹給水」とだけあり、ただ茫然としていた様子がこの日記からうかがえます。しかし一志校長は、8月24日に筑摩地国民学校へ行き御真影を拝んでいるのです。その後、1946年1月8日に御真影奉還式がありましたが、このとき校長先生は変わっています。戦争責任を取らされたのか、54歳で退職しています。1月9日には「御真影奉還ノタメ本町ノ門ヨリ五年以上並ビ御送リスル」とあります。

戦後、教育基本法が制定されました。資料に前文を載せてありますが、「…日本国憲法を確定し、民主的で文化的な国家を建設して、世界の平和と人類の福祉に貢献しようとする決意を示した。理想の実現は、根本において教育の力にまつべきものである」とあります。最初の安倍内閣のときに教育基本法が大きく変わっていますので、どこが変わり、またそれが今の教育にどうつながっているのか、資料に載せましたのでそれぞれ見ておいていただきたいと思います。

最後に、戦後衆議院では「教育勅語等排除に関する決議」、参議院では「教育勅語等の失効確認に関する決議」が行われました。教育勅語をもとにして行われてきた教育が大戦の悲惨な結果をもたらしたということで、新しい精神にもとづいて新たな教育を築いていくために、教育勅語を排除するあるいは失効させるという決議です。今の文部科学大臣が「教育勅語にはいいことが書いてあるからこれからの日本の教育に使っていこう」と就任記者会見で発言したということがありましたが、道徳教育が今年の4月から小学校で始まって

いて、中学校でも来年の4月から始まります。その道徳教育で使えるということは何をどうしようとしているのか、そういうことも含め、私は戦争体験のなかから決して忘れてはいけないと思います。

だいぶ時間が過ぎてしましましたが、これで以上となります。ありがとうございました。